



Data

監督: 刁亦男 (ディアオ・イーナン)
 出演: 廖凡 (リャオ・ファン) / 桂
 綸鎧 (ガイ・ルンメイ) / 王
 学兵 (ワン・シュエビン) /
 王景春 (ワン・ジンチュン)
 / 余皑磊 (ユー・アイレイ)
 / 倪景陽 (ニー・ジンヤン)

👁️👁️ みどころ

中国の新進監督・刁亦男 (ディアオ・イーナン) の、中国映画には珍しいフィルムノワール調のミステリー作品が、第64回ベルリン国際映画祭で作品賞と主演男優賞の2冠を！

犯人探しのスリルではスケート場とスケート靴が印象的だが、本作ではそれ以上に映像世界の独創性と緊張感に注目！

邦題、原題、英題の意味をしっかりと考えながら、ラストに打ち上がる、『哀戀花火』(93年)の美しさとは異質の美しい「白日焰火」を味わいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ベルリンで二冠を！その快挙に拍手！■□■

2014年2月に開催された第64回ベルリン国際映画祭で、山田洋次監督の『小さいおうち』(14年)、『シネマルーム32』161項参照)に出演した黒木華が、銀熊賞(主演女優賞)を受賞したことは日本中の大ニュースになった。これは、かつての名女優・左幸子、田中絹代に続いて、2010年に若松孝二監督の『キャタピラー』(10年)、『シネマルーム25』215頁参照)で寺島しのぶが同賞を受賞して以来の快挙だ。しかし、同映画祭で中国人の新進監督(第6世代監督)・刁亦男(ディアオ・イーナン)が監督した本作が、金熊賞(最優秀作品賞)を受賞した上、そこで張自立(ジャン・ズーリー)刑事役(と言っても、それは導入部だけで、ほとんどは落ちぶれ果てた元刑事役)を演じた廖凡(リャオ・ファン)が銀熊賞(主演男優賞)を受賞したことは、日本では(日中関係が最悪のこともあり?)ほとんど報道されていない。

しかし、銀熊賞(審査員特別賞)を受賞した『グランド・ブタペスト・ホテル』(14年)

『シネマルーム33』17頁参照)や、同じく銀熊賞(監督賞)を取った『6歳のボクが、大人になるまで。』(14年)『シネマルーム35』参照)を、押しよけての金熊賞受賞である上、銀熊賞(主演男優賞)との2冠、W受賞はすごいとしか言いようがない。その快挙に拍手!

■映像世界の独創性と張り詰めた緊張感に注目!■

本作は中国北部を舞台としたいわゆる「フィルムノワール」調のミステリー劇だが、はっきり言ってストーリー展開は難しく理解しづらい。したがって、犯人捜しの面白さという観点からの金熊賞ではない。

ちなみに、本作のチラシには「中国北部の現実を見据えた鋭い眼差し、雪に覆われた野外スケート場や広大な石炭工場をとらえる独特のカメラワーク、余白を残す大胆な編集。観る者をめくるめく現実と悪夢の狭間へと誘う、独創的でノワールな映像世界は、『罪の手ざわりの賈樟柯(ジャ・ジャンクー)、『殺人の追憶』のポン・ジュノらに続く並外れた大器の登場を予感させる。」と紹介されている。本作はまさに、ベルリン国際映画祭「好み」の作品に仕上がっているわけだ。

たしかに、本作の雰囲気は『罪の手ざわり(天注定/A Touch of Sin)』(13年)『シネマルーム34』269頁参照)や『殺人の追憶』(03年)『シネマ4』240頁参照)にそっくりで、今ドキの邦画とは全く異質の緊張感に包まれている。映画冒頭に映し出されるトラックの荷台、ベルトコンベアに乗って運ばれてくる石炭の中に紛れ込んだ人間の手、そんなシーンを観るだけで、たちまち緊張感でいっぱいになってくる。ディアオ・イーナンは、北京の中央戯劇学院で文学と脚本執筆の学位を取得して卒業した1969年生まれのもで、本作は監督3作目。なぜ中国にはこんなすごい監督が次々と登場してくるの?

■紅も黄色もすごかったが、白も黒も!■

「中国映画のニューウェーブここにあり!」と全世界に発信した陳凱歌(チェン・カイコー)監督の『黄色い大地(黄土地/Yellow Land)』(84年)『シネマルーム5』63頁参照)がロカルノ国際映画祭で銀豹賞を受賞したのが1985年。続いて1988年には第38回ベルリン国際映画祭で張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『紅いコーリャン(紅高粱/Red Sorghum)』(87年)『シネマルーム5』72頁参照)が、見事金熊賞を受賞した。

考えてみれば、中国映画がベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞したのは、『紅いコーリャン』の他は『香魂女 湖に生きる(香魂女)』(93年)と『トゥヤーの結婚(凶雅的婚事/TUYA'S MARRIAGE)』(06年)『シネマルーム17』379頁参照)だけだから、本作の金熊賞受賞がいかにかにすごいかがよくわかる。

本作の邦題は『薄氷の殺人』だが、原題は『白日焰火』。これは直訳すれば「白昼の花火

だ。ちなみに、「白日焰火」はあるナイトクラブの名前だが、本作ラストに見る、廃墟ビルの屋上から打ち上げられる大量の白昼の花火のシーンは圧巻だ。他方、英題は『Black Coal, Thin Ice』。これは直訳すれば、「黒い石炭と薄い氷」。映画冒頭に見る、ベルトコンベアに乗って運ばれてくる黒い石炭と、本作のファム・ファタール（運命の女、魔性の女）ともいべき謎の女・呉志貞（ウー・ジージェン）（桂綸鎂（グイ・ルンメイ））がアイススケート場で軽やかに滑る姿は、黒と白のコントラストが際立っている。そう考えると、黄色も紅もすごかったが、本作の白も黒もすごい！

■□■身元が割れた！ならば犯人は・・・？■□■

殺人事件の捜査の第一歩は被害者の特定。普通はそれはすぐにはできるものだが、身元不明の死体の場合は、捜査が難しい。したがって、6都市にまたがる15か所の石炭工場でバラバラに切断された男の死体のパーツが相次いで発見された事件では、被害者の身元確認が何よりのテーマだ。ところが本作では、ある工場で、被害者のものらしき血まみれの洋服と梁志軍と書かれた身分証明書が発見されたからラッキー。ならば、犯人の特定は時間の問題。捜査陣はそんな勢いだったが、「被害者」・梁志軍（リアン・ジージュン）（王学兵（ワン・シュエビン））の妻ウーは、報告を聞いて泣きじゃくるばかりで、ジャン刑事や同僚の王（ワン）刑事（余皑磊（ユー・アイレイ））らの質問に全然答えてくれないから、やれやれ・・・。

本作には、その後の捜査の進展状況をほとんど説明しないまま、いきなり容疑者逮捕のため、とある現場に踏み込むシーンが登場する。これはトラック運転手のリウ兄弟を逮捕するためらしいが、逃走しようとするこの2人の兄弟を逮捕し、署に連行しようとした時、上着を調べると、その中には何と拳銃が。そして刑事たちが「これは何だ！」と問いつめると、容疑者の1人がいきなりその拳銃を奪って刑事に発砲したから、刑事たちはビックリ。とっさにジャンは自分の拳銃を抜いて、2人の容疑者を射殺してしまうことに・・・。これからバラバラ殺人事件の容疑者の取り調べが進むと思ったのに、この結果ジャン自身もケガを負ったばかりか、事件は迷宮入りに・・・。

この事件が起きたのは1999年。本作導入部では、いかにも中国北部をイメージする寒村を舞台に、あっと驚くシーンを繋ぎながらこんなストーリーが展開していく。さあ、この導入部が終わると、次の本格的な展開は・・・？

■□■トンネルを抜けると雪国だった。なるほど、なるほど■□■

「トンネルを抜けると雪国だった」。これは川端康成の小説『雪国』の誰もが知っている有名な出だした。導入部では、バラバラ殺人事件の捜査に当たるジャンがいかにも未練たらしく妻（倪景陽（ニー・ジンヤン））から別れを宣告されてしまうシーンも登場するが、あの事件があんな形で中途半端なまま迷宮入りしてしまえば、心身共に傷を負ったジャン

の気持が折れてしまうのは当然だ。

しかし、それから5年後、川端康成の『雪国』のフレーズと同じように、車でトンネルを抜けると一面の雪景色が……。しかし、その道端に大型バイクを停め、寝そべっている男は一体ダレ？ひょっとしてこの男は、事故で死んでいるの？そう思って車が立ち寄ってみると……。その後のストーリー展開の中で、妻に捨てられ、ケガのせいもあって刑事を辞めたジャンは、今はしがたい警備員をしているが、生きる目的を失ったこともあり、毎日酒浸りの荒れた生活をしていることがわかる。酒の臭いをプンプンさせながら職場で中年女に絡むジャンの姿を見ていると、刑事上がりの出来損ないの哀れな姿そのものだが、それは誰よりもジャン自身が自覚しているようだ。

そこで、ある日5年前のバラバラ殺人事件とよく似た2つの事件の捜査のため、張り込んでいるワン刑事と偶然再会すると、ジャンは俄然興味を示し、勝手にその捜査(?)にのめり込んでいくことに。2人の男の殺人事件に共通するポイントは、第1にスケート靴を履いた足を切断されていること、第2に2つの事件とも5年前の被害者リアンの若き未亡人ウーと親密な関係にあったということだが、さて捜査の進展は……？

■□■銀熊賞の男優だけでなく、このイケメン俳優にも注目！■□■

本作で銀熊賞(主演男優賞)を受賞した廖凡(リャオ・ファン)は、私が観た映画では、『戦場のレクイエム(集結号)』(07年)、『シネマルーム22』218頁、『シネマルーム34』126頁参照)、『さらば復讐の狼たちよ(譲子弾飛/LET THE BULLETS FLY)』(10年)、『シネマルーム29』152頁、『シネマルーム34』146頁参照)、『ライジング・ドラゴン(十二生肖)』(12年)、『シネマルーム30』243頁、『シネマルーム34』432頁参照)に出演していたそうだが、正直私の印象には全く残っていない。したがって、ベルリン国際映画祭でいきなり主演男優賞受賞と聞いてビックリしたが、本作にみる重厚な演技を観ると、なるほどと納得できる。もっとも、パンフレットを見るとリャオ・ファンは1974年生まれだから40歳だし、まだ「イケメン俳優」もできそうなハンサムな顔立ち。しかし、本作のスクリーン上ではそのイケメンぶりを発揮するシーンは全くなく、ひげもじゃ顔で汚いジャンパー姿ばかりなのは、本人としてはイマイチ不満かも……。

他方、導入部では、バラバラ死体としてしか登場しない(?)ものの、中盤でウーの夫・梁志軍(リアン・ジージュン)役として姿を見せる王学兵(ワン・シュエビン)は、『三国志英傑伝 関羽(関雲長/THE LOST BLADESMAN)』(11年)、『シネマルーム28』109頁、『シネマルーム34』68頁参照)に王植役で登場していた、1994年に中央戯劇学院を卒業したリャオ・ファンと同じ年代のイケメン俳優だ。いくら、中国北部の田舎町といってもラブホテルはあるようで、そこに2人でしげこんだ(?)ウーとリアンの姿を見ていると、なぜか少しホットするとともに、アレ……？ウーの夫

リアンは、5年前のバラバラ殺人事件の被害者として発見されたのではなかったの？

もっとも、本作は後に登場する遊園地にある観覧車の中でのジャンとウーのラブシーンを全くスクリーン上に見せないのと同様、このラブホテルでの2人の「情事」もすべて省略している。そして、タバコを買うために外に出て行ったところで、リアンが「ある男たち」から追われ、その結果拳銃で撃たれて死んでしまうという緊迫シーンになっていくから、さらにアレレ・・・？私たち日本人には、中国人俳優の顔と名前がすぐに一致しないから一瞬誰が誰だか分からなくなることを含め、頭の中は混乱でグチャグチャに・・・。

■□■ヒロインの台湾人女優にも注目！■□■

他方、本作で魔性の女(?)ウーを演じたグイ・ルンメイは、16歳の時に、台北市の西門町でスカウトされた素人の高校生として『藍色夏恋(藍色夏恋)』(02年)でデビューし、鮮烈な印象を残した台湾の美人女優(『シネマルーム3』82頁参照)。その後、私がグイ・ルンメイを見たのは『言えない秘密(不能說的・秘密/SECRET)』(07年)(『シネマルーム20』358頁、『シネマルーム34』396頁参照)、『海洋天堂(Ocean Heaven)』(10年)(『シネマルーム27』219頁、『シネマルーム34』335頁参照)、『ドラゴンゲート 空飛ぶ剣と幻の秘宝(龍門飛甲)3D』(11年)(『シネマルーム30』252頁、『シネマルーム34』163頁参照)の3本だが、以降12年間、女優として順調に成長していることが本作を見ればよく分かる。

もともと細身の身体だけに、ジャンを含む多くの男をひきつける魔性の魅力を持っていても、儂げなところが本作のヒロイン(?)にピッタリだ。また、寒い地方の物語だから、多くのシーンは厚いコートと厚いマフラー姿だが、勤務しているランドリー店での薄着の姿を見ると、ほのかな色気も・・・。店内では店主の榮榮(ロン・ロン)(王景春(ワン・ジンチュン))と2人だけで過ごす時間が多いから、きっとこの2人もデキているはずだと睨んでいると、案の定・・・。ワン刑事らとは別に勝手な捜査(?)を続けるジャンは頻繁にこの店を訪れていたから、きっとこの2人の怪しげな雰囲気にも気づいていたはずだが・・・。

■□■スケート場とスケート靴が印象的！まさに薄氷の殺人！■□■

寒い中国北部のまちに、屋内ならいざ知らず、なぜ屋外のスケート場があるの？私にはそれが疑問だが、本作では『薄氷の殺人』という邦題にピッタリのスケート場とスケート靴が印象的。ジャンがウーと初デート(?)したのもスケート場だし、ジャンとワン刑事が犯人らしき男として追跡する男が持っているのはスケート靴だ。もっとも、ジャンとワン刑事がどのようにしてこの犯人らしき男に辿りついたのかの説明は十分されないので、「犯人捜し」というテーマでの面白みはないが、くり返して言えば、本作ではその緊張感がすごい。

もっとも、スケート靴を持ち歩く場合は、刃にカバーをつけるのが当然のマナーだと思うのだが、スクリーン上ではその男は満員のバスの中でも刃のついたスケート靴をそのまま持っているからビックリ。さらに、ワン刑事が犯人らしき男を追跡し、手錠をかけても、両手にスケート靴を持ったままだと、ちょっと油断すると刃で切りかかれるのでは・・・？ また、刑事は2人で行動するのが原則のはずだが、スクリーン上ではワン刑事は手錠をかけた後にケータイで応援を頼んでいたから、その時どうしても油断が生じるのでは・・・？ その結果ワン刑事に起きる悲惨な状況は、あなた自身の目でしっかりと。

■□■犯人は誰だ？スケート靴を持った男は誰だ？■□■

私には、寒い中国北部のまちにある屋外のスケート場でスケートを楽しむ人たちの気持がサッパリわからない。しかし、ジャンはスケートの初心者だったが、ウーの腕前はなかなかのもの。ところが、2人で楽しくスケートを楽しんでいた(?)のに、ウーが平然とコース外へ出て行ってしまったのは、一体なぜ？ジャンは必死でその後を追いかけたが、ひょっとしてこれはウーのジャンに対する好意の表れ・・・？

他方、ワン刑事がウーを追跡していく過程で、スケート靴を持った男を追いかけたのと同様、ジャンもスケート靴の男を追いかけたが、なかなか追いつくことができなかった。しかし、ある日遂に、追跡していたスケート靴の男がビニールで小分けされたいくつもの物体を、鉄橋から貨物列車の上に放り捨てる光景を目撃することに。そこで、ある日スケート場までこの男の後を追いかけたジャンが一計を案じ、受付で「リアン・ジージュンさんと呼び出してくれ」と頼み、リアン・ジージュンの名前がアナウンスされると、何とあのスケート靴の男はすぐにスケート場から逃げ出してしまったから、やっぱり！なるほど、なるほど・・・。

このような苦労の末に、ある1つの確信を得たジャンは、ウーとのデート(?)の中でウーに対して問い詰めていくと、遂にウーからも、①5年前、強盗殺人を犯したリアンが、自分の死を偽装して姿を眩ましたこと、②それ以降ずっと陰ながらウーにつきまとい、彼女に言い寄る男たちを殺害したこと、の告白を・・・。なるほど、なるほど・・・。すると・・・。

■□■客の苦情にどう対処すれば？5年前の被害者の特定は？■□■

近時、マクドナルドの商品への異物混入事件が頻発しているが、その場合、客の苦情にどう対処すればいいの？そんな視点から、マクドナルド側の対応(記者会見でのお詫びの姿勢の不十分さ)に批判が集中しているが、ウーが勤めるクリーニング店でも、客から預かった皮のコートのボタンが取れていたという苦情があったらしい。ワン刑事の姿が消えてしまった後のジャン独自の捜査(?)によって、その客から店主ではなくウーに対して巨額の賠償金が要求されたことがわかったと、5年前のバラバラ死体の被害者像が少し絞ら

れてきたようだ。そこでジャンが自腹を切って店主から1000円でその皮の上着を買取ると、内ポケットに1枚の名刺が入っていたから、そこから更に捜査が進んでいくことに・・・。

したがって、後半からラストにかけては、この名刺と皮の上着の持ち主探しから、5年前のバラバラ死体の被害者像が急速に特定されてくるが、そこで急浮上するのが巨額の賠償金を請求されていたウーだ。中国の経済格差の広がりや、日本をはるかに越えているが、社会の底辺で暮らしているウーに巨額の賠償能力などないことは明らかだ。すると、そこから客の要求はどんな方向にエスカレートしたの？そして、それに対してウーはどう対処したの？もちろん、昨今の邦画のようなわかりやすい説明があるわけではないが、次々と緊張するシーンが連続する中、被害者像を特定する作業が大詰めに向着て進んでいることは明らかだ。

しかし、この被害者がある人物に特定されればされるほど、「負け組だってやることを探している。でなければずっと負け組だ」とワン刑事に言って、あれほどバラバラ殺人事件の犯人探しに躍起になっていたジャンの気持は・・・？

■□■ラストの「白昼の花火」は何を暗示？■□■

本作では、きっと「現場検証」を終えた後の本作ラストに見る「白昼の花火」にビックリさせられるはずだ。パンフレットの中のインタビューで、ディアオ・イーナン監督は「白昼の花火」は、ある意味ファンタジーであり、人々が周囲の辛い状況から身を守るために使う、ある種の精神的浄化装置。このタイトルを使うことで、今の中国人が極度に浄化を必要としているということを示唆したつもりです」と語っている。ビルの屋上からド派手な音を立てて次々と打ち上げられる花火は、容赦なくパトカーにも飛んできたから、警察が直ちに対処したのは当然だが、これは一体誰の手によるもの？

このシーンからパンフレットで語る前述のディアオ・イーナン監督の思いを読み取ることができかどうかは別として、観客は一人一人邦題、原題、英題を比較しながら、このシーンの意味を考える必要がある。何平（フー・ピン）監督の『哀戀花火（炮打雙燈 / Red Firecracker Green Firecracker）』（93年）（『シネマルーム17』404頁参照）で観た、少数民族ナシ族の血を引くという美人女優・寧靜（ニン・チン）と黄河のほとりで展開される美しい花火の情景も美しかったが、それとは全く異質の、「白日焰火」にみるファンタジーに酔いしれたい。

2015（平成27）年1月16日記

